

# 三ヶ所遺跡

—県営東山梨ぬくもり団地建設工事に伴う発掘調査—

1997.3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

# 三ヶ所遺跡

—県営東山梨ぬくもり団地建設工事に伴う発掘調査—

1997.3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

## 序

本遺跡は、県営東山梨ぬくもり団地建設事業に先立ち発掘調査された山梨市上之割字八王子380番地ほかに所在する三ヶ所遺跡について、その成果をまとめたものです。

盆地の北東部に位置する本遺跡の付近は、笛吹川と重川に挟まれた緩傾斜地にあり、縄文時代から中・近世に至る遺跡が多数確認されています。特に日下部遺跡（山梨市小原東）に見られるように奈良・平安時代遺跡が顕著な存在を見せる地域です。さらに中世以降は、甲斐国内の統一に向け、領主層、土豪層が激しく競い合った地域でもあります。

三ヶ所遺跡は調査の結果、遺構こそ確認されませんでしたが、縄文時代前期の小集落の存在が想定されるところとなりました。平安時代においても、住居跡と考えられる遺構が確認されました。溝も4本確認され、このうち3号溝は南方に所在する連方屋敷に関係するものと捉え、これまで考えられていた時期より遙かに古い15世紀前葉～中葉には連方屋敷の成立があったのではないかと、屋敷跡の創建年代の不明なもの多い中で、年代推定を試みております。

以上、本報告書の概要を述べてきましたが、県内の歴史研究の一資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関、各位、地元の方々並びに直接調査、整理に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

## 例　　言

1. 本書は、山梨市上之割字八王子380番地ほかに所在する三ヶ所遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県営東山梨ぬくもり団地建設事業に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が県住宅課の依頼を受けて実施した。
3. 発掘調査、整理作業及び報告書の執筆、作成は山梨県埋蔵文化財センターが行い、同機関の坂本美夫・川手昌英・熊谷栄二・小林健二が担当した。
4. 写真撮影は遺構を坂本美夫、遺物を熊谷栄二が行った。
5. 出土品の石材鑑定は帝京大学山梨文化財研究所地質研究室長河西学氏に依頼した。
6. 本報告書に関わる出土品及び記録図面、写真などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまでの間、下記の機関、方々からご協力、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

山梨市教育委員会、三澤達也、両角加代子、平山 優

## 凡　　例

1. 図版の縮尺は原則として遺構を1/60、遺物を1/3としたが、大きさにより任意の縮尺としたものもある。
2. 遺構図中の数字は、深さを示し単位はセンチメートルである。

# 目 次

序

例言

凡例

## 第1章 調査の実施と経過

### 第1節 調査に至るまで

1. 発掘調査事務経過
2. 調査及び整理組織

### 第2節 調査の実施

1. 調査方法と発掘区の設置
2. 調査経過

## 第2章 遺跡周辺地域の状況

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

1. 位置
2. 地理的環境

### 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の概要

### 第2節 溝・住居跡と出土遺物

1. 1・2号溝
2. 3号溝
3. 1号住居跡

### 第3節 その他の遺構と出土遺物

## 第4章 まとめ

## 挿図目次

- 第1図 周辺地形図 ······ 2  
第2図 遺跡位置図 ······ 4  
第3図 遺構配置図 ······ 5  
第4図 土坑ほか出土品 ······ 11

## 図版目次

- 図版 1 1・2号溝平面図 (A区)  
図版 2 1・2号溝平面図 (B区)  
図版 3 3号溝平面図  
図版 4 1号住居跡・1号土坑平面図及び遺物分布図  
図版 5 1・2号溝出土縄文土器 (1)  
図版 6 1・2号溝出土縄文土器 (2)  
図版 7 1・2号溝出土縄文土器 (3)  
図版 8 3号溝・1号住居跡ほか出土縄文土器  
図版 9 1号住居跡・土坑出土土師器ほか  
図版 10 1~3号溝出土土師質土器  
図版 11 3号溝出土土師質土器ほか  
図版 12 1~3号溝出土石器  
図版 13 3号溝・1号住居跡ほか出土石器

## 写真目次

- 図版 14 出土遺構・遺物

# 第1章 調査の実施と経過

## 第1節 調査に至るまで

### 1. 発掘等事務経過

平成6年9月26日～10月7日 試掘調査実施、主幹課と協議  
平成7年5月19日 文化庁に発掘通知を提出  
平成7年5月28日 調査開始  
平成7年9月12日 調査終了、後に日下部警察署へ遺物発見通知を提出する  
平成8年1月8日～3月29日 整理作業

### 2. 調査及び整理組織

調査主体 山梨県教育委員会  
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター  
調査担当者 坂本美夫（副主幹・文化財主事）  
川手昌英（主任・文化財主事）  
熊谷栄二（文化財主事）  
小林健二（文化財主事）

#### 作業員・整理員

齋川いよ子、久保川正美、黒瀬信子、齊藤さち江、滝口寿美子、滝嶋清子、戸田ひろ、林周子、広瀬芳子、山崎靖子、谷沢けさせ、遠藤まさ美、白井麻子、村松江里子、  
出月多津子、出月多枝美、宇野和子、長田くみ子、長田千鶴、長田美和子、小林としみ、  
米山玉恵、渡辺礼子

## 第2節 調査の実施

### 1. 調査方法と発掘区の設定

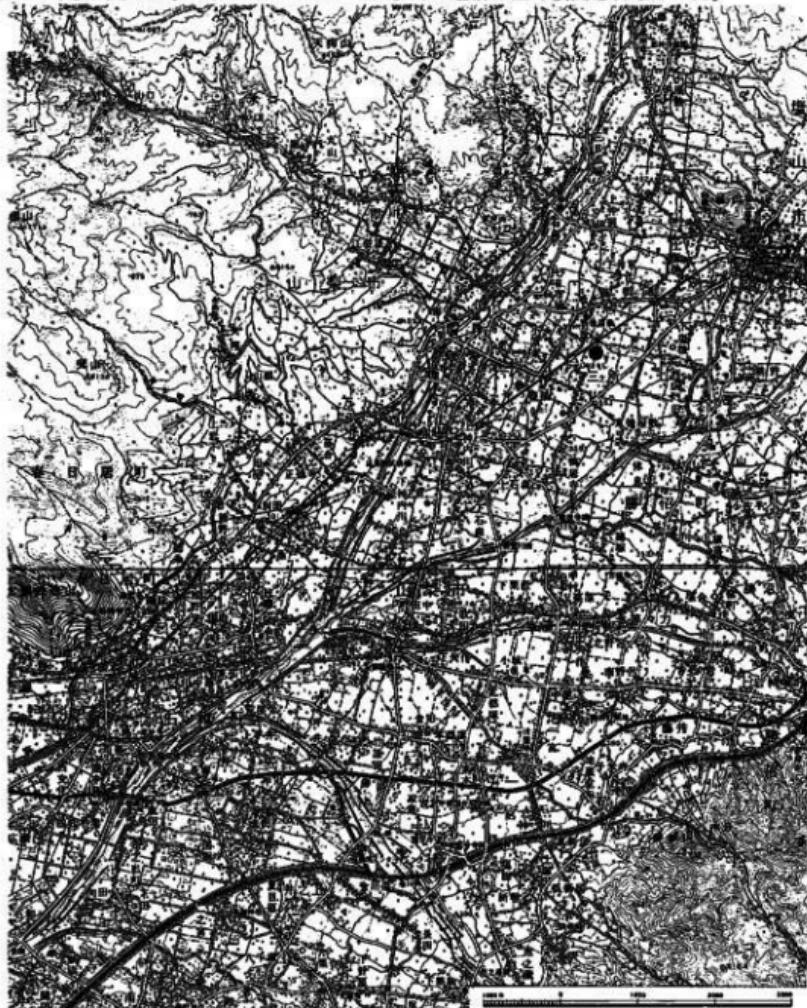
本遺跡は、周知の遺跡の西側で遺跡と接する場所にあたるために平成6年度に事業に先立ち試掘調査を実施したところ、事業地の南西部分で遺構、遺物の出土が確認された。このため、三ヶ所遺跡に包含される遺跡と考え、この部分の調査を実施するところとなった。

調査はグリッド方式で全面調査とし、工事工程との調整により、南側部分（A区）を先行し、その後北側西半分（B区）、そして北側東半分（C区）の順序で調査を実施した。

調査区の設定はA区の西側境界線を基準として方眼を組み、5mのグリッドを設定した。南西隅の杭を基準杭として、そこから東に向かってA～I、北に向かって0から15までの記号を付けた。

## 2. 調査経過

A区の調査は、排土を調査区内で処理するため、およそその半分のNo 3の杭から南側の調査を行い、その後No 3の杭から北側部分とB区、C区の調査を実施した。その結果、A区においてはゴミ穴や農作業に伴う土坑が多数が検出された中で、縄文土器などが入った溝4条、それに平安時代の竪穴住居跡と考えられる遺構1軒を検出した。B区においては、A区の溝の統計が1条検出された。C区においてはゴミ穴以外の遺構は全く検出されなかった。



第1図 遺跡位置（●印）と周辺地形図

## 第2章 遺跡周辺地域の状況

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

#### 1. 位置

三ヶ所遺跡の所在する山梨市は、甲府盆地の北東部に位置する。東を塩山市・勝沼町、南を一宮町、西を石和町・春日居町、北を牧丘町と接する東西10.8km、南北8.5kmほどの北東から南西方向に細長い市域をもつ。

本遺跡は市域の中心より北東方東端、塩山市との境界近くに位置する。JR中央本線東山梨駅の東北東方約200mに位置する。

#### 2. 地理的環境

山梨市は北東から南西に細長い市域を持つが、市域北西側は北東から南西に流れる笛吹川右岸よりほどなく秩父山系の前衛の山が立ち上がり山間地域の様相を急激に強める。一方、笛吹川左岸より南東側は一変して緩傾斜面の平地となり、南側へ次第に低くなっていく。さらに南側には重川が北東から南西方向に流れているが、この緩傾斜面のほとんどが、笛吹川によって造成された扇状地である。遺跡はちょうどこれら笛吹川と重川との中間である標高368m付近に立地する。

### 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

遺跡の所在する山梨市北部地域は、笛吹川と重川に挟まれた緩傾斜地にあり、これまでに縄文時代から中近世に至る遺跡が28ヶ所ほど確認されている<sup>10</sup>。中でも特に奈良・平安時代に顕著な存在を見せる。なお、笛吹川支流の児川においてはナウマンゾウの臼歯が調査などによつて確認されており<sup>11</sup>、旧石器時代の人々の生活に思いを馳せる地域でもある。

縄文時代の遺跡（3、19～23、26）はこれまで7ヶ所ほどが確認されている。これらはいずれも本遺跡の北側において点々と分布するが、今回本遺跡からも縄文土器片が出土しており西側への広がりが確認された。

弥生時代の遺跡は、今のところ本遺跡の東方において確認されるのみのようである。

古墳時代の遺跡（4～6、24～26）は、弥生時代同様に本遺跡の東方に確認されるのとあわせて、南西側に古墳時代後期の古墳の築造が確認されるようになる。

奈良・平安時代（1-1-1-2・3、6-19、21、24～26）になると、爆発的ともいえるような遺跡の増加がみられる。特に本遺跡の北西部に濃密な分布があるが、この中には多数の住居跡の確認された日下部遺跡<sup>12</sup>も含まれており、平安時代の『和名抄』中にある山梨郡加美郷に比定されるものであると考えられる<sup>13</sup>。本遺跡もこの中に入るものであり、この時期に隆盛のあった地域と考えられる。

中近世の遺跡（2、8）としては、本遺跡の西方に安田氏館跡が、また南側に接するように連

方屋敷跡が見られる。



- 1-1. 三ヶ所遺跡(調査地) 1-2. 三ヶ所遺跡 2. 速方屋敷 3. 東後屋敷遺跡 4. ふじ塚古墳  
5. 稲荷塚古墳及び塚越遺跡 6. 平冢古墳及び平冢遺跡 7. 大堀南遺跡 8. 安田氏館跡 9. 大堀東遺跡  
10. 大堀北遺跡 11. 原塚遺跡 12. 日下部遺跡 13. 東原遺跡 14. 天神原遺跡 15. 中沢遺跡  
16. 宮ノ西遺跡 17. 十王堂遺跡 18. 阿弥ダ堂遺跡 19. 石原遺跡 20. 千手院前遺跡 21. 清水尻遺跡  
22. 長屋敷遺跡 23. 町田遺跡 24. 芦原田遺跡 25. 西田遺跡 26. 東田遺跡

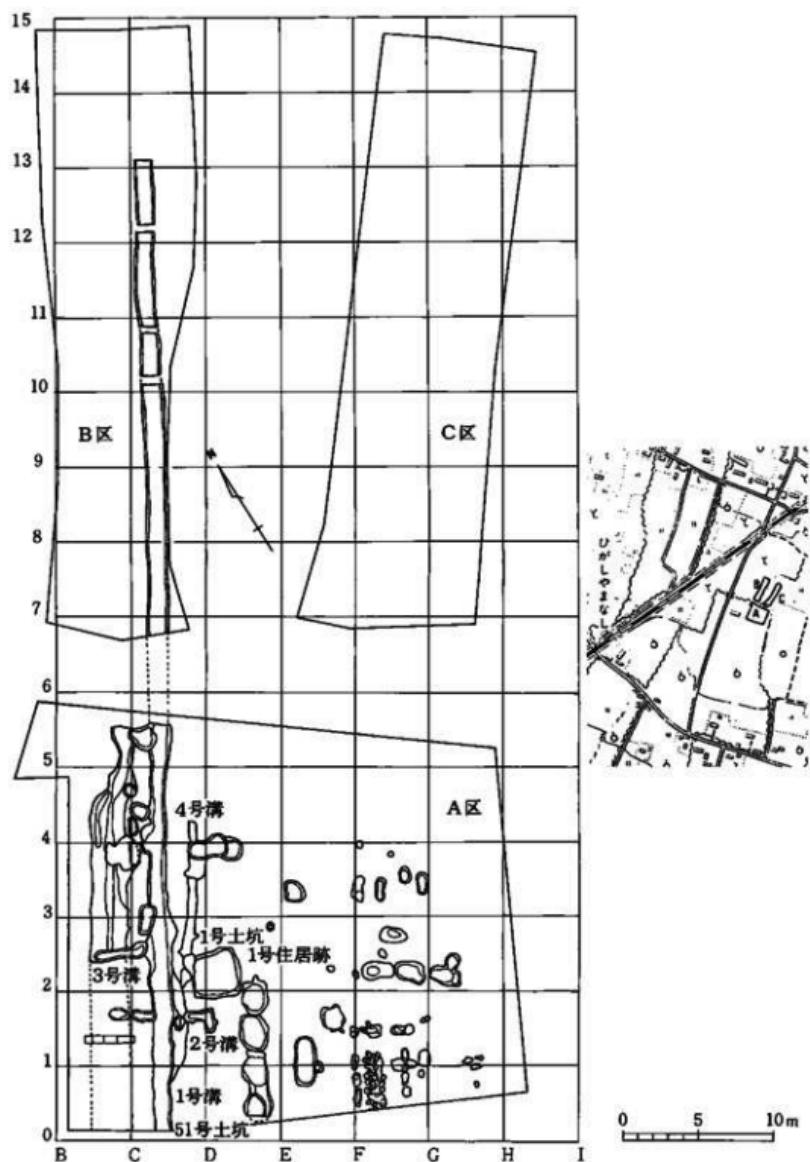
第2図 遺跡位置と周辺遺跡分布図

### 第3章 遺構と遺物

#### 第1節 遺構の概要

今回調査によって確認された遺構は、A・B区で溝4本、住居跡1軒、土坑多数である。溝は調査により西側でほぼ南北に延びて存在するのが確認された。このうち1・2号溝は浅く、幅の狭い形状であるが、南北端がさらに調査区外に延びるものといえる。3号溝は1・2号溝に比べ、幅の広いV字状の深い形状の溝であり、性格的に1・2号溝とは異なるものといえる。4号溝は幅0.6m、深さ0.1m前後の小規模な溝である。

土坑のうち幾つかは、確認の際にブドウの枝を留めるバインド線などの混入が認められ、ゴミ穴と確認された。また残りの多くも遺物などの出土が微々たるもので、かつ細片であることから、ゴミ穴や農作業に付随するものと考えられる。特にF0～F2、G0～G2グリッドには小穴が敵状に穿たれていたが、これはゴボウなどの収穫によってできたものであろう。



第3図 造構配置図

C区においては、最初土の変化がやや幅広であるが筋状に見られたことから溝の存在を想定したが、土の自然堆積によるものであることが確認された。また土坑も幾つか見られたが、やはりゴミ穴などであった。

なお、土坑についてはそのほとんどがゴミ穴、農作業に付随するものと考えられることから、特殊的な遺物などのみられるものについて取り上げることにする。

## 第2節 溝・住居跡と出土遺物

### 1. 1・2号溝（図版1・2）

1・2号溝はA区の西コーナーあたりから、北東方向にローム層などを掘り込んだほぼ一直線の溝で、その先はB区を抜けて上方（北東方）に向かうものと考えられる。一方、A区から下方（南西方）においても、引き続き存在するものと考えられる。なお、B区の溝の縁は擾乱も少なく比較的整然とした直線上を呈するが、A区においては後世の擾乱が多く見られることがから凸凹が目に付く。調査で確認された溝の長さは58.8mほどである。

1号溝は、断面が台形を呈する、幅1.4m、深さ0.4～0.7mほどの溝である。一部が杭N0.C2からC1あたりでオーバーフローし、東側に新たな流路を作るが、再び杭N0.C0あたりで1号溝に吸収される。この新たな流路を2号溝とした。

2号溝は最も新しい溝であるが底に鉄分がたまり硬化していることから、比較的長い期間流れていたものであろう。なお、このオーバーフローした前後の1号溝の中にも、上層に鉄分の堆積部分が見られ、2号流路があったことが部分的に認められる。

遺物は、B区において縄文土器片、須恵器片、陶磁器片などが覆土中から出土したが、その量は少量であった。しいていえば、C6～C8に多く見られるようである。

A区でもB区と同様なものが覆土中から出土したが、B区に比べ量が多い。特に2号溝の見られる付近において集中している状況であった。上部において陶磁器片や瓦類が確認されたが、その多くは縄文時代前期の土器片であった。

なお、遺物の中の内耳形土器には、隣の3号溝出土の内耳形土器と接合する例も見られた。

1・2号溝は、縄文土器を出土するものの、縄文時代の溝ではなく、おそらくそれ以降の新しい時期の所産の溝と考えられる。周囲にあった縄文時代前期の遺物が開削などによって流れ込んだものと思われる。

出土した縄文土器はすべて細片であり、器形の復元できるものは全くない。文様などで分類すると6種類に細分できる。

1類（図版5-1～4） 確認できるのは4点である。深鉢形土器の口縁部、胴部の破片で、いずれもヘラ切り浮線文のみで構成されるものである。なお、浮線文といつてもわずかに盛り上がりが確認できる程度のものである。

2類（同5～36） 深鉢形土器の口縁部と胴部の破片である。縄文を地文としてその上に竹管による沈線を施すものである。5～7、10～13、15～19は弧状ないし円状の沈線文である。

3類（図版6-1～11） 深鉢形土器の破片で、沈線文を基調とするものである。なお、1

にはボタン状の貼付文が見られる。2~11には縄文の地文が確認できないが基本的には2類に含まれるものと考えられるものである。

4類(同12~37、図版7-1~21) 深鉢形土器の口縁部、胴部の破片である。縄文を基調とするが、中には指頭ないしへらなどによる横引きなどで縄文を消す例もある(同17)。

5類(図7-22) 1点のみである。竹管による沈線文に、さらに連続瓜形文の施されるものである。

6類(同23~42) 文様などの認められないものを基本とするが、不鮮明でわからないものも一括した。41・42は底部片である。

7類(同43~45) 口縁部の破片である。竹管による沈線文であるが、2類と異なり沈線が強く盛り上がるものである。

これら1から6類は諸磯b式のものがほとんどであり、3類のボタン貼状の土器は諸磯c式であろう。7類は五領ヶ台式土器であろう。

石臼(図版12-1)は1・2号溝の南端で確認された。安山岩製の上臼で、おおよそ1/4強が残存する。側縁は上縁・下縁を欠くが、ほぼ垂直に仕上げられている。大きさは、芯棒受けの中心から側縁までで、14.5cmほどで、直径29cm、厚さ12.2cm(上縁部を除く)を測る。くぼみは中心から縁に向かってわずかな勾配で上がっているが、縁の立ち上がりに近い位置で欠損している。このため上縁の高さはわからないが、幅は側縁が残っていることから最大でも2cm以下と考えられる。下面は、主溝により8区画されたものと考えられる。1区画には4~6条の副溝が穿たれている。主溝、副溝の形態は、ほぼ同じであるが、幅については区画によって広狭が見られ、おおよそ1~2mm、深さ1~2mmほどのV字状ないし半円形を呈する。副溝の間隔は、均一でなく、広狭さまざま、やや雑な感を受ける。芯棒受けは直径5.2cm(上端)、底で2.2cm、深さ2.2cmの凹状を呈する。ふくらみは1cmほどを測る。側縁に長方形を呈すると考えられる挽手孔が穿ってある。この孔の下底は、下縁から6.2cmほどのところにあり、奥行きの深さは3.5cmほどを測る。

土師質土器(図版10-1~3)には、摺鉢(1)、鉢(2)、内耳形土器(3)とがみられた。摺鉢は口径34cmほどで、12本1単位の摺目がみられる。外面が灰色、内面が黒褐色を呈する。鉢は口径26cmほどで、器形にゆがみがみられ、片口の可能性も残る。内外面とも褐色を呈する。内耳形土器は浅鍋ないし深鉢形のもので、口径31.9cmで褐色を呈する。

### 2.3号溝(図版3)

A区の1・2号溝の西側に沿って北東方向に直線的に延びる溝である。ただし、B4グリッド付近から蛇行状態が見られ、またB区において全く確認されていないためB6グリッド付近で東側に向きを変えるものと考えられる。

南側部分については、B1グリッドにトレントを設定して確認し、これ以南は土の変化から引き続き存在するものと考えている。調査で確認した溝の長さはB1グリッドのトレントまでで21.2mほどである。3号溝の断面は1・2号溝とは違い、V字状を呈するものである。広いところで幅2.33mあるが、北側B5グリッドにおいて0.95mと一端しばまり、またすぐ広くな

るようである。深さは1mほどである。1号溝同様に後世の掘削による土坑などが多数見られるが、特にB3・4グリッド付近の瓢形の土坑は芋穴と考えられるものである。遺物は、1・2号溝に比べ少ない。上部に陶磁器類、瓦などが、下部から縄文土器を中心として内耳形土器なども確認されている。

出土した縄文土器は1・2号溝同様にすべて破片で、器形の復元されたものはない。文様などから分類すると5種類に細分できる。なお、1・2号溝の分類にあわせて記述する。

1類（図版8-1） 1点のみである。ヘラ切り浮線文の施されたもので、深鉢形土器の口縁部である。

2類（同2～9） 縄文を地文として、その上に竹管による沈線を施すものである。このうち2、7は弧状の沈線文を確認できるものである。これらの多くは胴部破片であろう。

4類（同10～17） 縄文を基調とするもので、多くが胴部破片と考えられる。

6類（同18） 無文の口縁部の破片である。

これら1類～6類はいずれも諸磧b式のものであろう。

7類（同19） 沈線を基調とする口縁部の破片である。ただし2類に比べ強く盛り上がったものである。7類は五領ヶ台式土器であろう。

土師質土器（図版10-4・5、図版11-1～8）には摺鉢（図版10-4）、片口（同5）、内耳形土器（図版11-1～2）、皿（同3～7）がみられる。摺鉢は口径38.7cmで外面が褐色、内面が黒褐色を呈する。摺目の詳細は不明。片口は細片で、大きさはわからない。褐色を呈する。内耳形土器は2点みられ、1は口径30cm、底径19.5cm、高さ15.1cmを測る。外面胴部に横位のヘラ削状の痕跡が見られる。内外面とも黒褐色を呈する。2は口径27.4cmほどで、色調は1と同様である。皿は底が回転糸切未調整のものである。

瓦質土器と考えられる鉢（図版11-8）の破片がある。内外面とも灰色を呈し、刺突による菊状の文様が施されている。直径22cm前後と考えられる。

内耳形土器は、いずれも浅鍋ないし深鍋形のもので、口縁部形態などから整形のものは、今のところ全く確認されていない。この内耳形土器については、長野県や埼玉県における研究がみられ、これによると整形の出現時期についていずれも16世紀中頃の時期が考えられている。従ってこれからすれば本遺跡の出土品の時期は大まかに16世紀中頃以前ということになる。本県の内耳形土器は、16世紀前葉から浅鍋形が現れ、16世紀中頃に整形の形態のものがみられるとしており<sup>10</sup>、先の時期と同じである。深鍋形の口縁形態はいずれもクランク状を呈するものである。このクランク状の形態は年代的には15世紀中葉以降となっている。従って本遺跡出土品は15世紀中葉前後あたりに置かれるものであろう。これ以外の鉢、摺鉢は、それ自体から造られた年代をつかむのは難しいが、内耳形土器の入った溝の中からの出土であり、ほぼこの時期のものと考えてよいものではないだろうか。土師質の皿の形態も15から16世紀の特徴を見せるものであり、先の考えに矛盾はないものであろう<sup>11</sup>。

茶臼（図版13-1）は、安山岩製の上白である。側縁はほぼ垂直な造りであるが、残存部は下端にみられるのみで、上部は大きく剥落している。なお、この残存部の割れ目には黒褐色の

固形物が線上に認められ、割れた茶臼を接着剤（うるし、にかわ）で接合したものである。大きさは芯木孔から下面の縁まで10.2cmほどであり、直径20.4cm、厚さ12.5cm（現存部）である。くぼみは、中心から外側へ緩やかな勾配で上がり、おおよそ6.5cmほどの所で、上縁の立ち上がりへと移行する。この先は大きき欠損していると思われるが、それでも0.8cmほどの高さまでは確認できる。上縁の幅は最大でもおおよそ2.5cm以下となる。芯木孔は上面（くぼみ側）、下面（ふくみ側）とも2.5cmであるが、その途中が2.1cmほどで少し痩んでおり、両端で広くなるような造りである。下面是主溝により8区画されたものと考えられ、1区画には7～8本の副溝が彫られる。これら、溝は、芯木孔から外縁まで通して彫られている。主溝・副溝は幅、深さともに1.5mmで、断面V字状ないしU字状に彫られている。副溝のならびはほぼ等間隔で、整然と並んでいる。ふくみは6mm以上である。側縁の中央付近に、縦、横1.8cm、奥行3cmほどの挽手取付け孔が穿ってある。茶臼は三輪茂雄氏（『臼』1978）によると、臼の目の溝が周縁まで達しているのが中世遺跡出土の茶臼の一般的に見られる特徴であるとされている。本例も周辺まで達しており、この限りでは中世の遺品といえよう。三輪氏はさらに武田信玄愛用の茶臼「いば丸」をみて、臼の「直径に対する上臼の高さの比が大きい点でも古い形態を残している」とし、また同氏の著書に掲載されている茶臼をこの比率の順序で並べてみると古い方から新しい方に向かうに従って、比の小さくなしていく傾向が読みとれる。本例は上縁を欠くが、0.686～0.637の比の中に存在するものと考えられる。この数値は、同書中の勝沼氏館跡（山梨県）から松尾城（長野県）にかけての比率であり、これからすれば本遺跡出土の茶臼はおおよそ1560～1590年ころの年代が推定できるところとなる。

石臼（図版12-2）口安山岩製で、直径約20cm、厚さ10.3cmを測る。中央に直径8cm、深さ5cmほどの孔が穿ってある。孔の面は凸凹の仕上がりで、全く滑らかではない。材質といい、孔の仕上がりといい、五輪塔の風輪の可能性が強い。

防衛食容器（図版4-1）は、陶製である。1/4ほどが残る。「(防10) 特許眞空容」と記されており、欠損部分には矢印と「矢印ノクボミヲ釘デツクト蓋ガ取レマス」と書かれていたのであろう。

集録器（同2）は、近代ころの綿糸の筋ぎに用いられたもので、磁器製である。中央に極細い穴が穿たれている。

3号溝は、1号溝同様に縄文時代から昭和までの遺物が確認された。しかし3号溝の造られた時期は形態から内耳形土器の15世紀中葉前後ころと考えられ、16世紀末ころまでは機能していたものと考えられる。

### 3.1号住居跡（図版4）

C1、C3、D1、D3グリッドに位置する。プラン確認によって判明したものであるが、床などに明確なものが見られず、住居跡か否か調査の段階でも迷ったが、東壁に焼土が見られカマドの可能性の高いことや遺物の出土、またカマドの位置と遺物との年代に矛盾が見られないことなどから住居跡と捉えたものである。住居跡の平面形態は、北西及び北東コーナー付近に後世の土坑が穿たれて、一部明確にならなかったところもあるが、東西3.1m、南北3.0mの

ほぼ方形を呈する。主軸方向はN-115°-Eを指す。

床は中心部にやや堅い面が壁縁より10cmほど下方で確認されたが、きわめて部分的であったため、さらに掘り下げたが床面は確認できなかった。おそらく先の壁縁より10cmほどの部分が床面と考えられる。これはカマドの焼土の高さとも矛盾しない。カマドは東壁のほぼ中央に設置されていた。付近に礫が見られたがカマドの用材と判断はできない。焼土は僅かに認められ、かつ先に述べたように上部に薄く認められるにすぎない。

遺物はカマドの正面において多く認められた。土師器の壺、皿類であり、平安時代の前半頃と考えられるものである。また、繩文土器などが混入していた。

繩文土器は、すべて細片であり、器型の復元されるものはない。

2類（図版8-20、23~30）は、口縁部及び胴部の破片で、繩文を地文としてその上に竹管による沈線が施される。20、23、24は弧状の沈線文である。

3類（図版21、22、31~36）は、口縁部及び胴部の破片で、繩文を基調とするものである。いずれも諸磯b、c期であろう。

有孔土器（図版9-8）は細片で、文様は全くみられない。諸磯b式期であろう。

土師器（同1~7）には、壺（1~5）と皿（6、7）とが確認される。壺は法量的には、底部×2<口径の範囲のものと思われる。口唇部は丸形ないし尖形のものである。外面は胴部に斜位のヘラ削りを施すものを基本とするが、同部へのヘラ磨きは全く見られない。底部は手持ちヘラ削りのものであり、胴部同様ヘラ磨きはみられない。内面は胴部に放射状暗文がみられるものの、見込み部には全くみられない。皿は、6が3段に屈曲する形態のものと考えられ、内面に横位のヘラ磨きが認められる。7は口縁部が肥厚する直前の形態と考えられるものであるが、暗文等は全くみられない。なお壺1の内面にはススが口縁部から見込みにかけて付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。甲斐形IV~X期と考えられ、10世紀前半ころの時期が想定される。

石臼（図版13-3）は、花崗閃緑岩製で、長径19.3cm、短径18.5cmの橢円形を呈する。厚さは12.4cmを測る。中央片側に直径8cm前後、深さ2cm弱の穴が穿ってある。穴の面はザラついており、五輪塔の風輪かあるいは軸受石であろう。

### 第3節 その他の遺構と出土遺物

#### 1. 土坑

土坑は、多数確認されたが、そのほとんどが後世のゴミ穴と思われた。ここでは、特徴的な出土遺物のみられるものについて記述することとした。

1号土坑（図版4）は、1号住居跡の北西コーナー付近に存在する。長さ0.76m、幅0.25m、深さ0.2mほどを測る。中より土器の小片とともに貨銭（第4図3・4）が3枚確認された。

確認できたのは大觀通寶（1107年）宣德通寶（1433年）、などのいずれも渡来銭である。

51号土坑（第3図）は、長さ1.5m、幅1.4m、深さ0.3mほどの土坑である。中より土師器壺（図版9-9）、鉢（同10、11）、臺（同12、13）高壺（同14）などが出土したが、いずれも細片である。壺は胴部が斜位のヘラ削りのみで、内面に放射状暗文が施されるものである。鉢は口

縁部が段状を呈するもので、内面に放射状暗文がみられる。壺は口縁部から胴部にかける破片と底部の破片である。外面を縦位、内面を横位のハケメで調整する。底は木葉痕が見られる。高坏は壺の破片で、脚部に延びる付近にヘラ削りがみられる。

土師器は、甲斐形壺のⅨからⅩ期で、10世紀前半ころの時期が推定でき、ほぼ1号住居跡と同じ時期といえる。

## 2. その他

調査区内より表探されたものを一括する。

石臼（図版12-2）は、デイサイト製の下臼で、おおよそ1/4が残存する。側縁はほぼ垂直の仕上げである。大きさは側縁から芯棒孔の中心までで、13.5cmほどで直径27cm、厚さ11cmほどを測る。

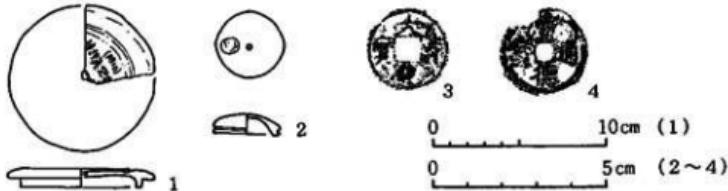
上面は主溝により8区画されたものと考えられる。1区画には4～5本の副溝が施されている。主溝、副溝の形態はほぼ同じであり、また幅等も同じようになっている。幅2mm、深さ2mmほどでV字状ないし半球形を呈する。副溝の条間はほぼ同じようであるが交叉したり、曲線になったりする部分があり、やや雑な感を受ける。下面是縁の部分が滑らかに仕上げられているが、その他の部分は剥離痕が著しい。芯棒孔は、（制作時に）斜めに穿ったもの上にさらに、正常な位置に穿ち直したと思われる2段状の穿孔痕がみられる。逆ラッパ状に穿たれ、上面で1cm、下面で3.8cmほどの径となっている。ふくらみは大きく5cm弱である。

石斧（図版13-4～6）が3点確認されている。4は楔形打製石斧、5・6は短冊形打製石斧である。

楔形打製石斧は、ホルンフェルス製の大型品であるが、一方を欠いている。現状では刃部幅13.2cm、上部7.6cm、長さ15cm、厚さ3cmほどの大きさで、重量は170gである。

側縁は背を付けるためかやや鈍角に剥離をいれている。これに対した刃部は鋭角状に行われており、部位の機能にあった調整となっている。刃部は片方の面に偏った側に付けたと考えられるが、途中反対側に移った形態となっている。おそらく、この部分は使用等によって欠損したものと考えられる。

短冊形打製石斧のうち5は、粘板岩製である。刃は斜刃である。大きさは幅5.5cm、長さ11.4cm、厚さ1.6cmで重量は125gである。6は、ホルンフェルス製のやや小型品である。刃は丸刃である。幅2.9cm、長さ7.8cm、厚さ1.3cmで重量は35gである。



第4図 土坑ほか出土品

## 第4章 まとめ

本遺跡からは、古くは縄文時代前期の諸磯期、五領ヶ台期の土器が確認され、遺構等は確認されなかったが、これらの時期の集落の存在していただろうことを推定するには十分な土器の量であろう。出土した土器の量からすれば御坂町花鳥山遺跡<sup>⑦</sup>、大泉村天神遺跡<sup>⑧</sup>などのような大規模な集落は想定できず、ごく小規模な集落と考えられる。このような小規模と考えられる同時期の遺跡は盆地内に数多く見られるようである。山梨市内でも市教育委員会によって調査された東後屋敷遺跡<sup>⑨</sup>からも諸磯式土器が確認され、その量からすればやはり小規模な集落が想定されるものと考えられる。三ヶ所遺跡では土器型式で1ないし2型式の時間が認められる。他の小規模集落の多くが同様な傾向をとるものと考えるが、小規模集落の類例を蓄積することによってその性格を捉えることが可能となり、大規模集落との関係が鮮明にされるものと考えられる。その意味で本遺跡の確認された意義も大きなものがあろう。

中世の遺構としては、3号溝があげられる。なお1・2号溝については、遺物は中世の時期を示すものも見られるが、遺構については、明確な判断を下せない。3号溝の形態は、断面がV字状に掘削されている点に特徴がある。このようなV字状の溝はよく館跡（於曾屋敷ほか）などの溝に見られる形態であるが、本遺跡地において館などがあったという言い伝えはない。しかし、東方に接して南北朝時代の古刹清白寺があり、また、南100mほどに武田氏の藏前衆の庁所とされる連方屋敷があり、環境としては中世的色合いの強い地域と考えられる。

3号溝はそのまま真っ直ぐ南下すると連方屋敷の北側を巡る堀の中央やや西寄りの位置に接続することが十分考えられる。この溝の位置は、連方屋敷が南北に延びる微高地上に造られていることを考えれば、水を北側の堀から左右の堀に等しく分水することを可能にする位置といえる。吉村稔氏は甲府盆地の城・館跡の自然的位置研究で、塩山・山梨市地区の城館跡と水路網について触れている<sup>⑩</sup>が、その中の図面を見る限り、この地域では基本的に地形に沿った形（北東から南西）で、水の発源地から自然水路、人工水路などを経て、屋敷の北側付近に達する水路が見られる。これらから3号溝の連方屋敷北側の溝における分水は自然の理に合うもので、断面形態などと合わせて連方屋敷に強く関係する遺構と考えることができる。

連方屋敷については幾つかの考察がある<sup>⑪</sup>。最も新しいものに、「やや東に主軸をずらせた一辺約100メートルの不整形を呈し、北東と南側の一部を除き土塁が巡っている。土塁の規模は基底部の幅8～15メートル、高さ2～3メートルを測る。堀は北側と東側に残存しており、ほかの部分についても水路が囲み、かつては土塁外縁の四辺とともに堀で囲まれていたことが想定される<sup>⑫</sup>」とほぼ一町四方の屋敷とされている。

また、屋敷内には墓地があり、江戸時代の墓石のほかに中世の五輪塔も見られるなど、連綿と続いていることを彷彿させる。連方屋敷の詳しい経営年代はわかっていない。しかし『甲斐国志』が「是モ古屋氏也今同族ノ者三人居レ之」、「軍鑑藏前衆ノ頭四人ノ内古屋道忠・同兵部アリ、同内匠・同文六郎モ同衆ナリ...」とあることと、近くに八日市場なる地名が見られる

ことなどから、武田家の蔵前衆頭を務めた古屋氏の居址と推定されている<sup>10</sup>。最近、「八日市場の名主文書の中に、安田義定の九世に安田孫左衛門尉光泰といつて足利尊氏に仕え、この屋敷に住し、そのため連方屋敷と称したという記録」があるということから武田氏の時代以前は安田氏関係の屋敷跡だった可能性もあろうとする考えが出されてきている<sup>11</sup>。しかし、武田家の蔵前衆の設置の時期は明確となっていないようである。蔵前衆の設置は、地域の土地持土豪を取り込むことによって可能となったものと考えているが、これには地域の安定した時期、すなわち武田家の最も安定した時期に創設されたものであろう。信玄の時期が最も可能性の高い時期といえるが、さらに信玄の父信虎の業績について見直す考えが出されており<sup>12</sup>、やや安定していた信虎の時期までさかのばれる可能性もあるう。

だが、信玄・信虎のいずれの時期（16世紀代）としても、3号溝出土の内耳形土器の年代観である15世紀前半～中葉ころとは大きくかけはなれているものといえよう。

連方屋敷について、その内郭部分を平成7年度に山梨市教育委員会が調査している。建物の建て替えに伴う調査であるが、土間の部分より内耳形土器が多数出土している<sup>13</sup>。この内耳形土器は分厚く、瓦質で、一見して3号溝出土品とは全く違う感じを受けるものである。また口縁部から胴部への移行が直線的で、しかも口縁部が短く、形態的にも違いが認められるものであり、時期の下降するものと考えられる。調査では、江戸末期から明治初期の地鎮具が確認されていることから、この分厚い内耳形土器もその時期のものと考えられ、3号溝とは直接結びつくものではない。しかし、3号溝出土内耳形土器－茶臼－内部出土内耳形土器などからすれば、出土地点は違うが中世から江戸・明治まで時間的には連続することが確認され、屋敷の経営年代と捉えることもできる。これから3号溝は堀への分水のために造られたと考えられるとしたことにそれほど矛盾はない。連方屋敷は15世紀前半～中葉にその築造の初現を想定することができよう。武田氏以前の安田氏との関係が取りざたされているが、今後の検討に待つところが多いといえよう。従って連方屋敷は15世紀前半～中葉に既に機能していたのであって、安田氏、武田氏と関係を考えるより15世紀前半～中葉の土豪層の屋敷と捉えるのが無難であろう。その後、武田氏の時期に蔵前衆として再編されたものと考えることもできよう。

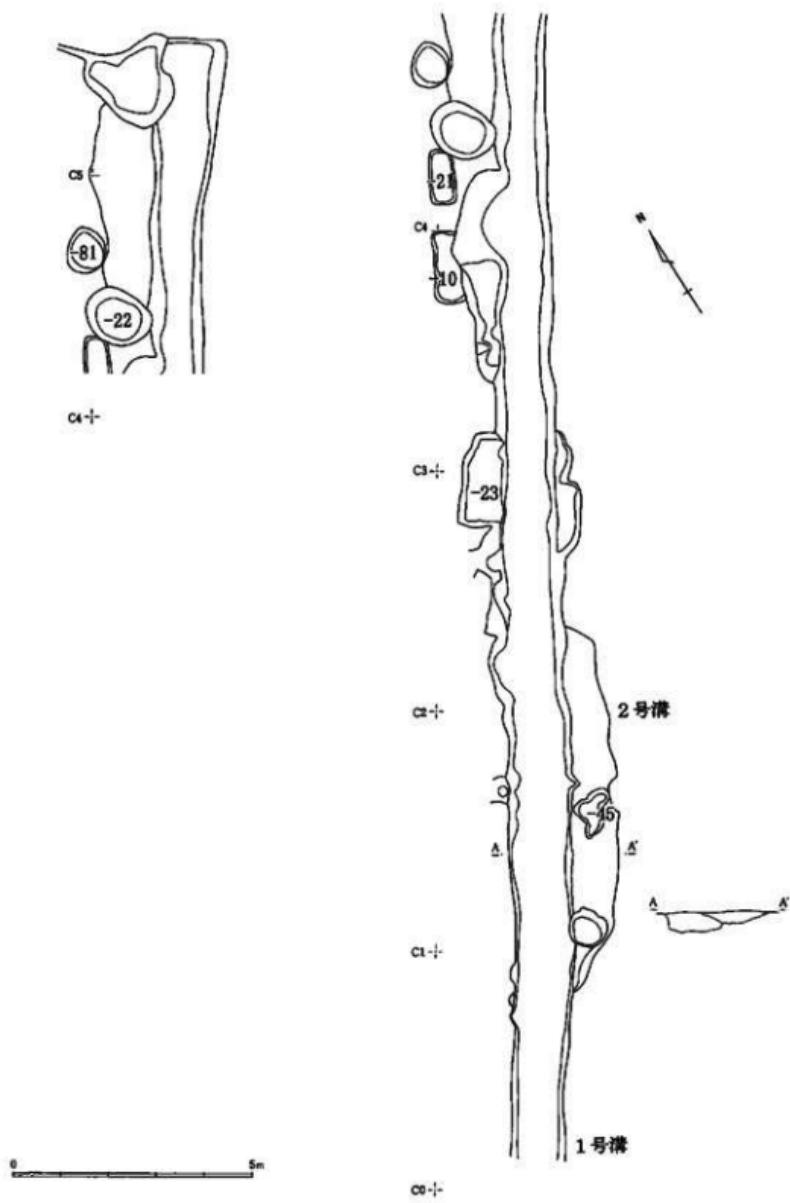
県内の方一町の屋敷跡については、その詳しい経営年代のわからないものがほとんどと聞く。この解明なくして、中世～近世における社会の実状を捉えることはできないと考え、今後の県内における屋敷跡の経営年代の解明が重要な課題といえよう。

今回調査した、連方屋敷本体がどこまで遡ることができるのか研究が進み、3号溝との接続が明らかとなって初めて決着を見るものといえるが、今回の調査において、その一端に迫ることのできた意義は大きいものがあると考える。

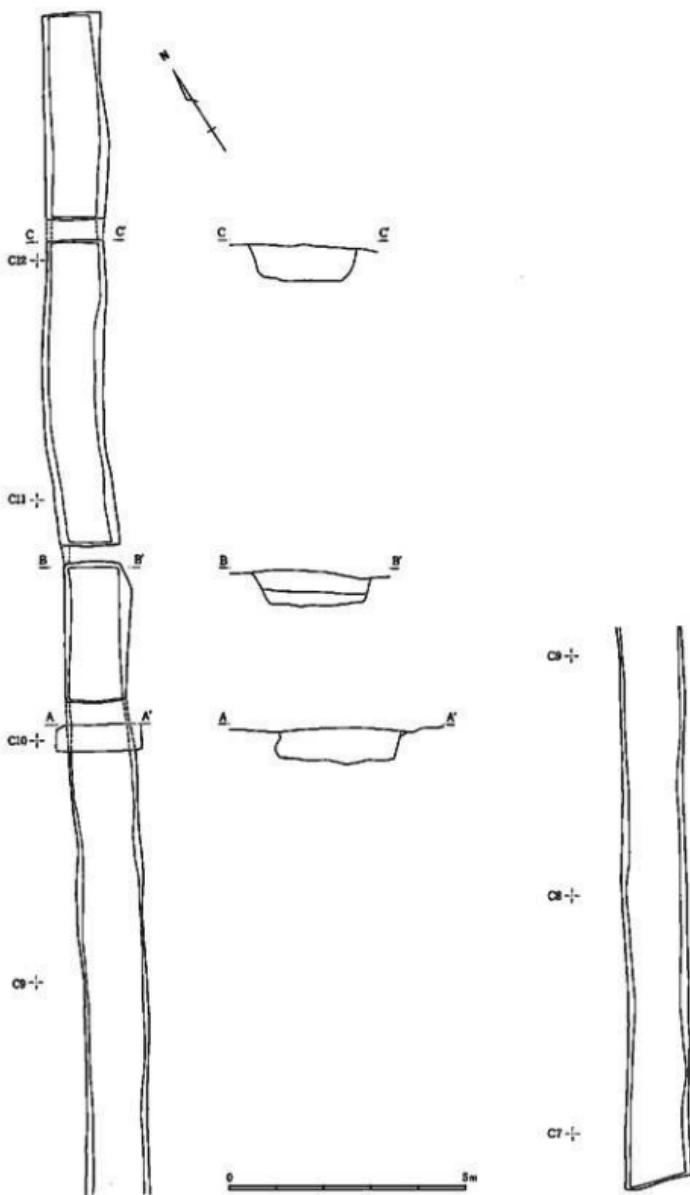
最後に調査に際し、指導、助言あるいは援助いただいた関係各位ならびに機関、および発掘調査、整理作業に従事した各位に、厚く御礼申し上げたい。

## 註 参考文献

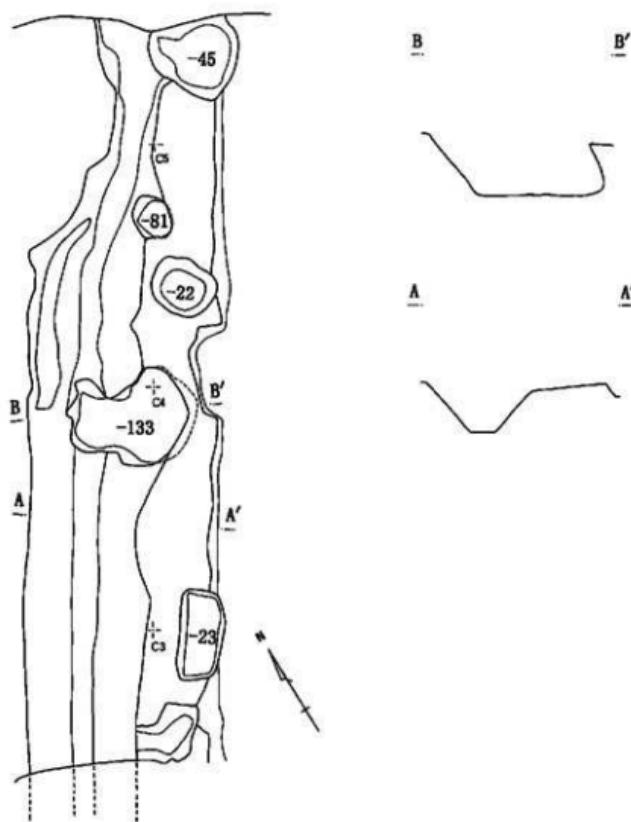
1. 山梨県教育委員会 1969『山梨県遺跡地名表』
2. 高野政文・五味信吾他 1995『児川一河川改修に伴うナウマンゾウ化石発掘調査』  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第108集
3. 上野晴朗 1987『日下部』山梨市教育委員会
4. 磯貝正義・飯田文弥 1973『山梨県の歴史』
5. 森原明廣 1993『研究紀要』9 山梨県考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
6. 坂本美夫 1983『山梨県における十五世紀以降の土師質土器編年—境川村寺屋出土品を中心にして』『甲斐考古』20の1
7. 長沢宏昌他 1989『花島山遺跡・水呑場北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集
8. 新津健、米田明訓 1994『天神遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第97集
9. 三澤達也 1995『東後屋敷遺跡』山梨市文化財調査報告書第4集
10. 吉村 稔 1986「平地部の城・館跡の自然的位置」『山梨県の中世城館跡—分布調査報告書』
11. 小野正文 1980「山梨県—東八代郡」『日本城郭大系』8 長野・山梨
12. 信藤祐仁 1991「連方屋敷」『定本 山梨県の城』 山梨県
- 13~15. 上野晴朗 1986『武田信玄—城と兵法』
16. 平山優 1994『信虎生誕500年を迎えて』山梨日々新聞9月15日掲載
17. 山梨市教育委員会のご厚意により実見させていただいた。



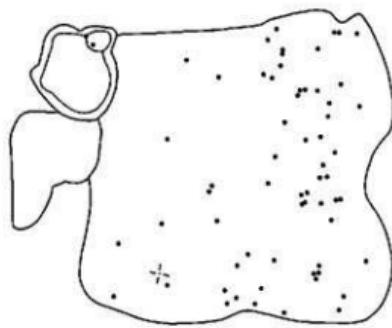
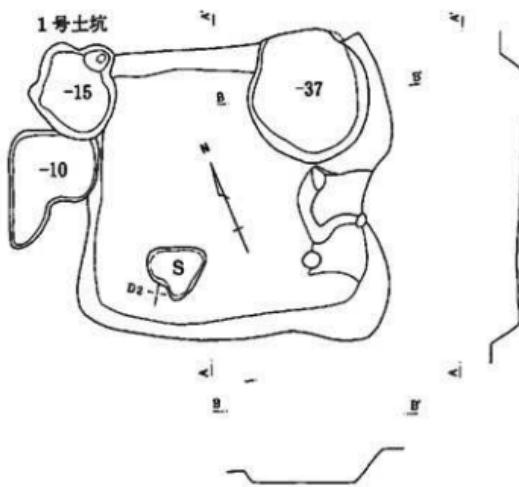
1 · 2号溝平面图 (A区)



1・2号溝平面図（B区）



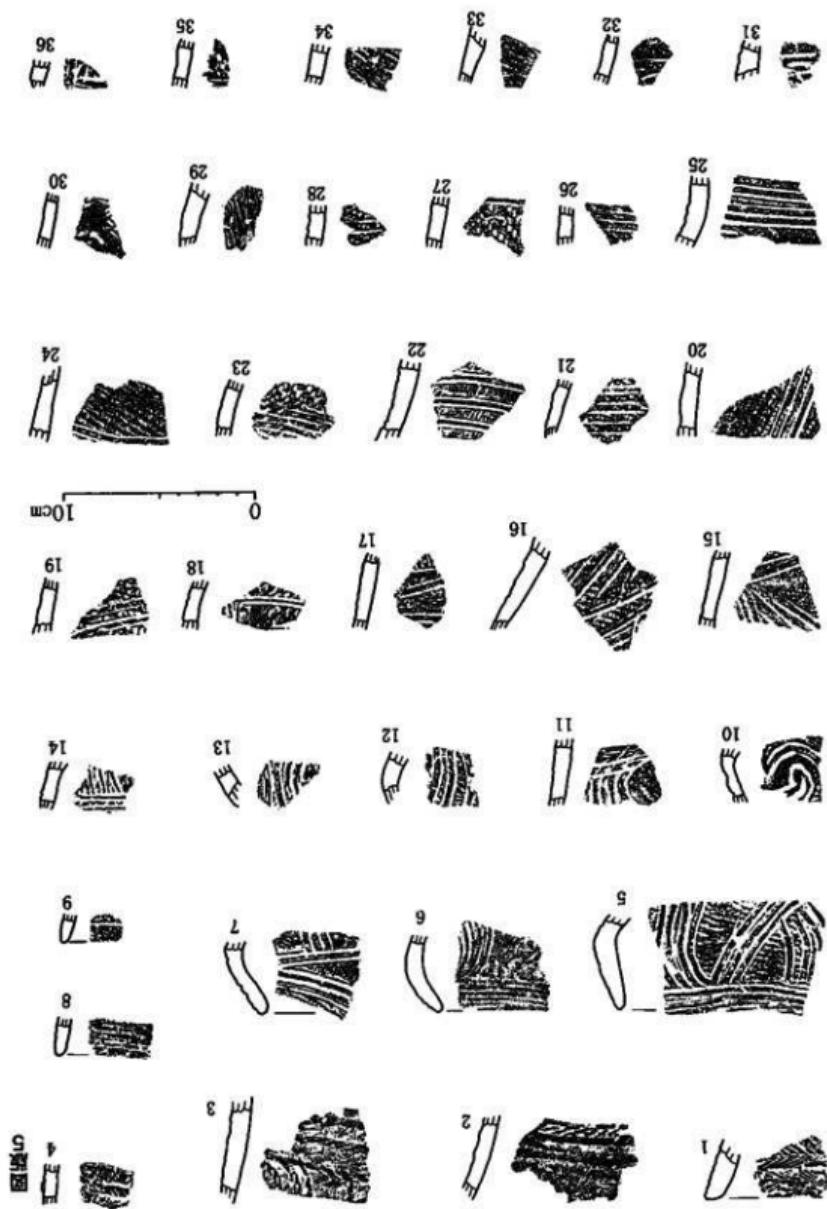
3号溝平面図

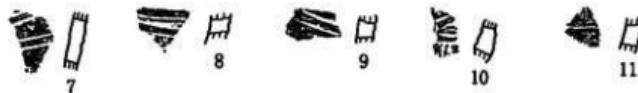


0 3m

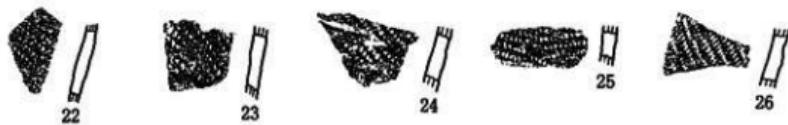
1号住居跡・1号土坑平面図及び遺物分布図

1·2号墓出土器物 (1)

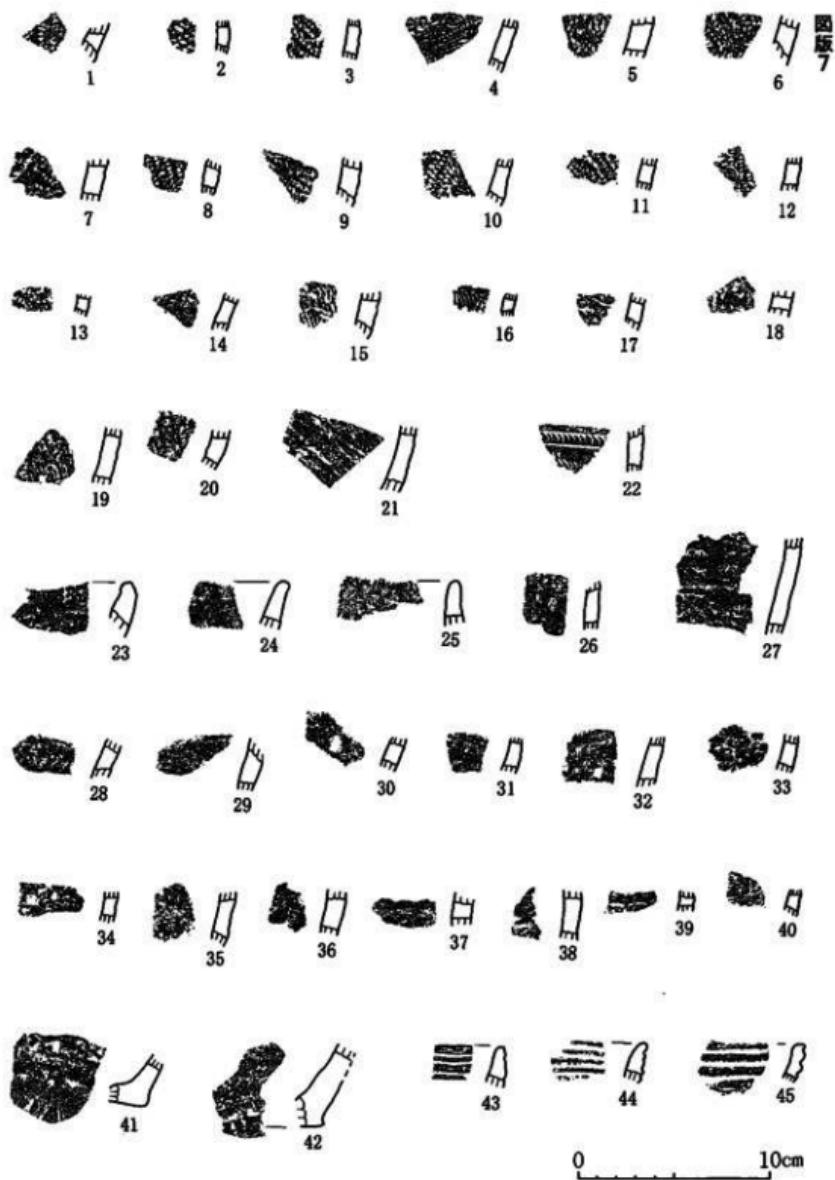




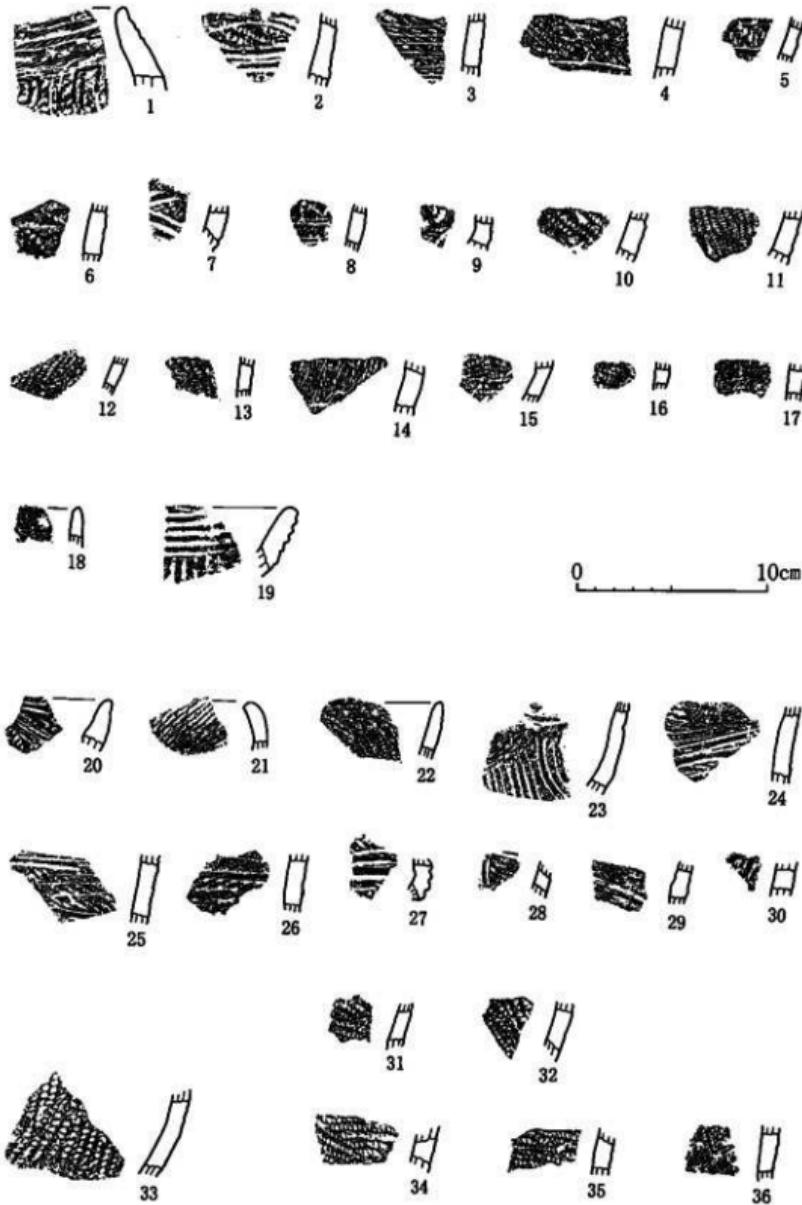
0 10cm



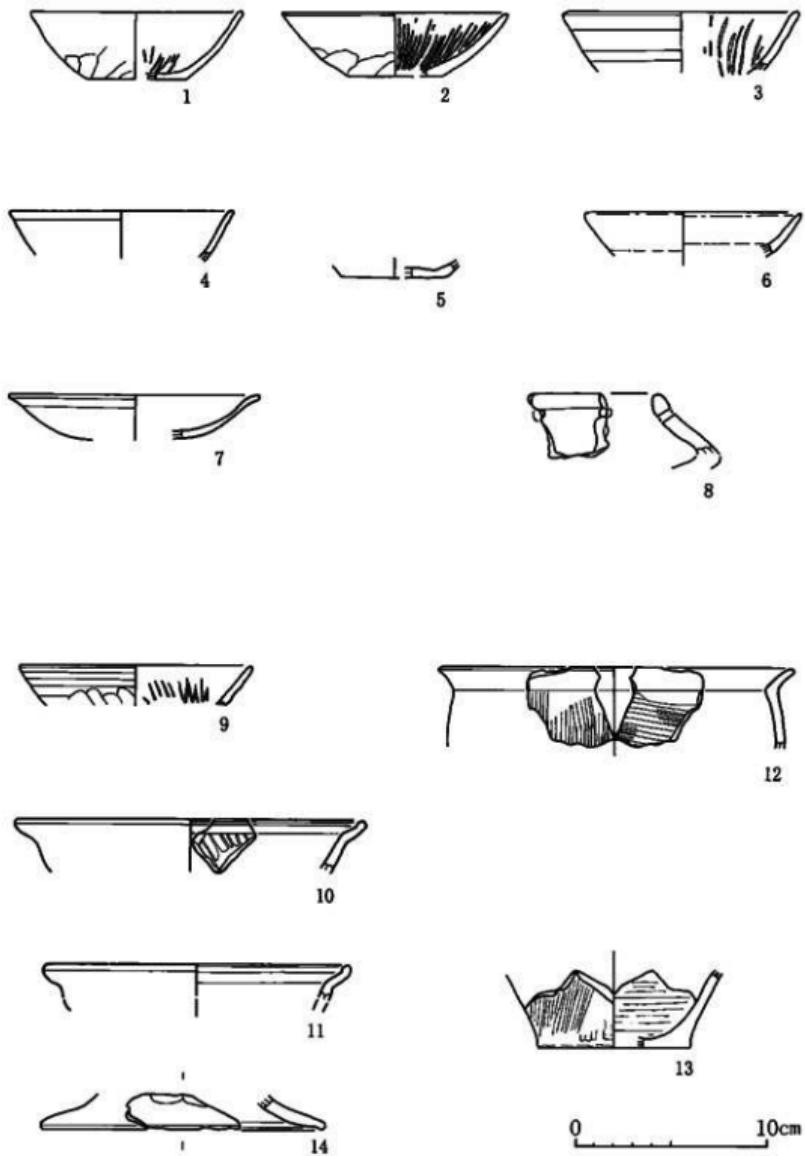
1 · 2号溝出土繩文土器 (2)



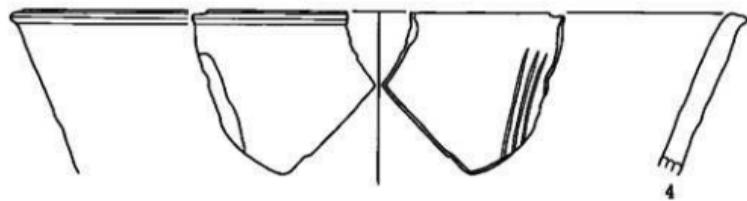
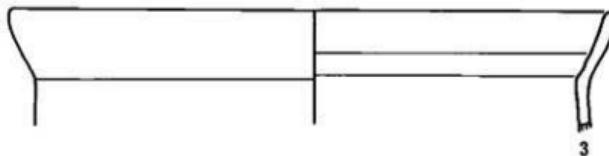
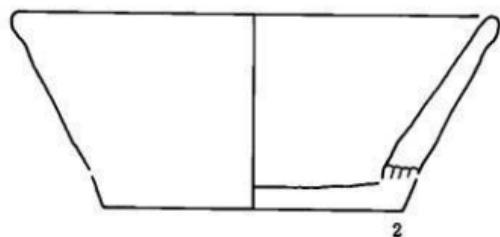
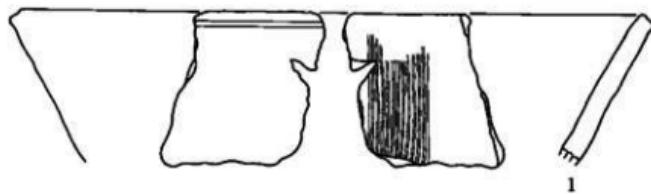
1 · 2号溝出土繩文土器 (3)



・3号溝・1号住居跡ほか縄文土器



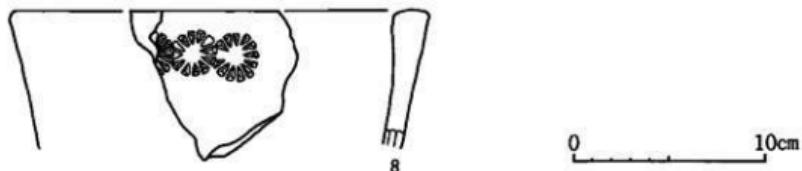
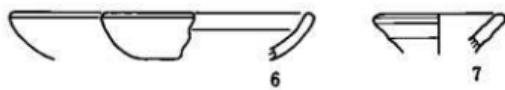
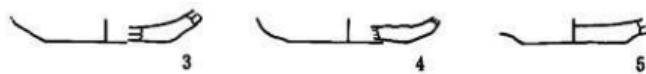
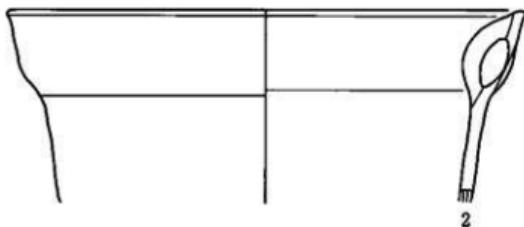
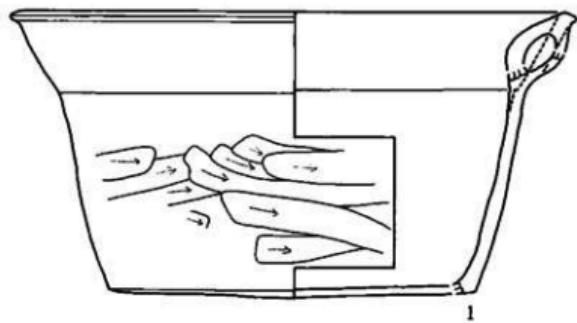
1号住居跡・土坑出土土師器ほか



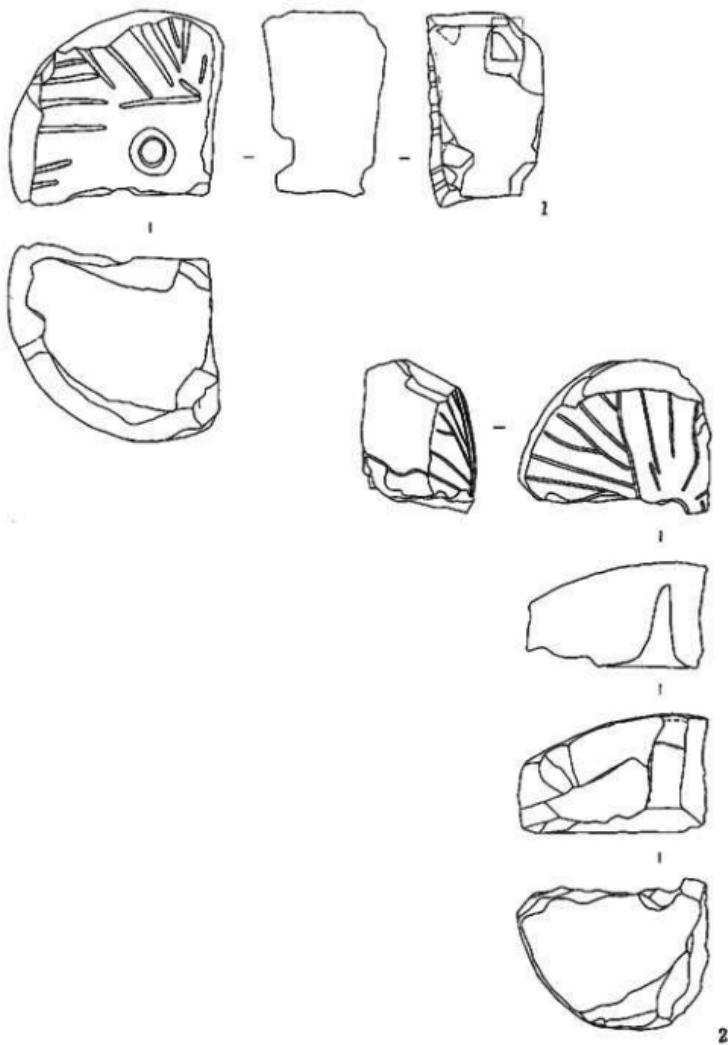
0 10cm



1 ~ 3 号溝出土土師質土器

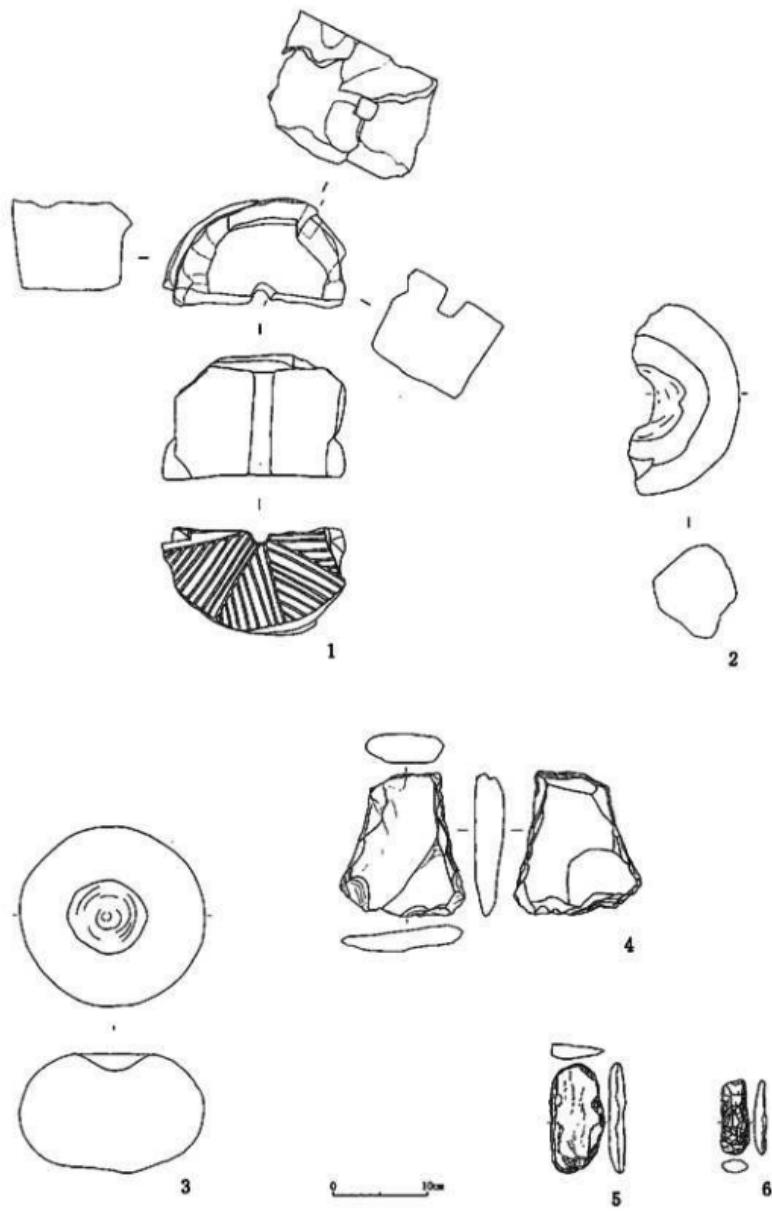


3号溝出土土器ほか

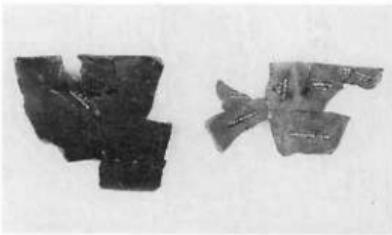


0 10cm

1~3号溝出土石器



3号溝・1号住居跡ほか出土石器



## 報告書概要

フリガナ	サンカショイセキチョウサホウコクショ	
書名	三ヶ所遺跡調査報告書	
副題	県営東山梨ぬくもり団地建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第127集	
編著者名	坂本美夫・熊谷栄二	
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3016	
印刷所	(株)峡南堂印刷所	
印刷日・発行日	1997年3月24日・1997年3月31日	
サンカショイセキ	所在地	山梨県山梨市上之割字八王子380他
三ヶ所遺跡	25000分の1の地図名・位置	塙山 北緯35°41'27" 東経138°42'32" 標高368m
概要	主な時代	縄文時代前期・平安時代・中近世・近世
	主な遺構	平安時代の住居跡1軒、中近世の溝4本
	主な遺物	縄文時代前期の土器・石器(打製石斧)、中近世の土師質土器、瓦器、昭和の国防食器、陶磁器
	特殊遺構	
	特殊遺物	
調査期間		
1994年9月26日～10月7日(試掘調査)		
1995年5月28日～9月12日(本調査)		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第127集

## 三ヶ所遺跡

印刷 平成9年3月24日

発行 平成9年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

山梨県土木部

印刷 佛峠南堂印刷所

